

聞かせたまひて、内に關白のこと申さむと思ひたまひて、この殿の門を通りて、
 まゐりて申したてまつるほどに、堀河殿の目をつづらかにさし出でたまへるに、
 帝も大將も、い^いとあさましく思し召す。大將はうち見るままに、^{鬼の間に}立ちて鬼の間の
 方におはしぬ。關白殿御前につい居たまひて、御氣色いと悪しくて、^{最後の除目}
 目行ひにまゐりてはべりつるなり』とて、藏人頭召して、關白には頼忠のおとど、
 東三条殿の大將を^(受取)取りて、小一条の濟時の中納言を大將になし聞こゆる旨旨下し
 て、東三条殿をば治部卿になし聞こえて、出でさせたまひて、ほどなくうせさせ
 たまひしぞかし」
 左邊 (即位) 右邊 (當時の)

- (注) ○祖父親——祖父。 ○御前にさぶらふ人々——ここでは、自分の前に控えている人々。
 ○陣のうち——近衛の陣の内側。 ○昆明池の障子——清涼殿の東庇にある御立。
 ○屋の御座——清涼殿中央の天皇の御座所。 ○つづらか——目を大きく見開く様子。
 ○鬼の間——清涼殿南西の部屋。 ○頼忠——実頼の子で、兼通・兼家には従兄弟。
 ○濟時——師尹の子で、同じく従兄弟。 ○治部卿——治部省の長官。四位相当。

【同い】

- ① 点線部1「かの殿の年ころの者」とはどういう者か (指示語の内容を示して)。

(堀河殿の)

長年おはえしている者

- ② 点線部2を品詞分解して現代語訳せよ。

動詞、連用形の名に

とぶらひに

格助詞

なり

格助詞

あるだう

訪ねる

おはする

に

こ

は

見舞う

おはする

に

こ

は

- ③ 点線部3「あさましくやすからぬことなり」という気持ちに兼通がなつたのはなぜか。

弟が關白から退きける

- ④ 点線部4「最後の除目」の内容はどのようなものか (簡潔に)。

除目「人事異動

通制年々回春

果たぬ除目

秋可の除目

同司など地方官

中央官係... 〇等。此

今日は(臨時)より大興なることなり。

なご。場合では、目下、諸君も
官職が滞り、人々には敬愛を得る

帝の代行として、關白
が家康未定務

【語彙・文法】 (○) 語彙・● 文法・☆ 常識。ただし重なるところも

- ことわり ○年ころ ○今はかぎり ○さぶらふ (謙讓語) ●にておはしまししほどに
☆先追ふ ○とぶらひ ●にこそ ●御前なる ○取り遣る ○大殿籠る ○ひきつくるふ
○早く ○内 ○あさまし ○心憂し ○をこがまし ●おはしたらば ○やすからず
●臥したまへる人の ☆御前 (前座) ☆もののつかせたまへるか ○うつし心 ○あやし
○君達 ○つい居る ☆除目

【文法基礎練】 断定の助動詞

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
なり	なら	なり	なり	なる	なり	(なり)	形動
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	形動
(下接語)	—ば	—しけり	—し	—とき	—ども	—	

意味

(なり) ①断定 (〜だ・である) ②存在 (〜に)

(たり) ①断定

接続

(なり) 体言+活用語の「連体」形

↑伝聞推定の「なり」は活用語の「終止」形 (う変は「連体」形) 接続

…「男もなる日記といふものを、女もしてみんとてなり」(土佐日記)

(たり) 体言 (※漢文調) ↓活用語につやない

↑完了の「たり」は活用語の「連体」形接続

【現代語訳】

この対面して座っている侍が言うには、「兼通殿が兼家殿の官職を取り上げ申し上げなさったときのいきさつは、道理のことだと (私は) お聞きしていました。私の祖父は、あの殿 (兼通殿) に長年仕えていた者でございましたので、こまかにお聞きしましたよ。この殿たち (兼通・兼家) のご兄弟の仲は、長年の官位の勝ったり負けたりうちに、仲が悪くなつて年月を過ごされていたときに、兼通殿がご病気が重くおなりになつて、もはやこれまでという状態でいらつしやつたときに、東の方で、(貴人の車の) 先払いをする声が聞こえたので、

判断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

断

(兼通殿の)御前にお仕えしている人たちが『どなたの車か』などと言っていると、『兼家の
 大将殿が参上なさいます』と人が申したので、兼通殿はお聞きになって、『長年仲が良くな
 くて過ごしてきたが、(弟は)わしがもう今はの際だと聞いて、見舞いにいらっしゃったのだな』
 とおっしゃって、お身の回りにある見苦しいものを片付け、お休みになっている部屋を整え
 などして、(兼家殿を)入れ申し上げようとしてお待ちになっていたが、『(兼家殿の車は兼通
 様の御邸を)もう通り過ぎて、内裏に参ってしまった』と人が申すので、(兼通殿は)
 ひどく驚き呆れ、みじめな気持ちになって、『(わしの)御前に仕えているそなたらも、(兼家
 を迎えようとしたわしを)愚かだと思っているであろう。(兼家が)来られたならば、関白な
 ど議ってあげようと申そうと思っていたのに。このようだから、長年仲が良くなって過
 してきたのだ。(兄との最後の対面にも来ないとは)呆れた、不愉快なことだ』とおっしゃって、
 臨終の床についていらっしゃる人(兼通)が、『わしを抱き起こせ』とおっしゃるので、(お
 仕えする)人々は変だと思っていると、『車の支度をせよ。前驅(貴人の車の前を馬で先導す
 る者)を招集せよ』とおっしゃるので、殿は物の怪がお憑きになったのか、正気を失ってお
 っしゃっているのかと、(お仕えする人々が)奇妙に思い申し上げているうちに、御冠をご用
 意させて、参内のための装束もお身につけになり、内裏に参上なさって、(乗り物が乗り入れ
 られない)近衛の陣から内側はご子息の肩を借りて、滝口の陣のほうから、帝の御前(清涼
 殿)に参上しなさって、昆明池の障子のもとに出ていかれたところ、屋の御座のところで、
 兼家の大将が帝の御前に伺候なさっているところであつた。兼家の大将は、兼通の関白殿が
 すでにお亡くなりになったとお聞きになって、帝に関白のことを奏請しようと思いなさって、
 兼通殿の邸の門を素通りして参内して帝にお話し申し上げているところに、(死んだはずの)
 兼通殿が目まぐるしく出てこられたので、帝も兼家の大将も、ひどく驚いたことだ
 と思ひになる。兼家の大将は(兄を)ばつと見るとすぐに、立ちあがって鬼の間のほうへ逃
 げられた。兼通の関白殿は帝の御前に膝をついて坐り、お加減はひどく悪いものの、『最後の
 除目を執行に参内しましたのです』といつて、蔵人頭をお呼びになり、次の関白には頼忠の
 大臣、兼家殿からは近衛大将の官職を取り上げて、小一条の落時の中納言を大将にして差し
 上げるという宣旨を下して、兼家殿は治部卿に任命申し上げて、宮中を退出なさり、ほと
 もなくして亡くなったのですよ』

